

『有能なメイドの愛し方♥』

著：森本あき

ill：樹 要

「ケイさんは、何をやっていらっしゃるんですか？」

「スーパーメイドだと、昨日渡した名刺に書いてあったはずだ」

ケイは淡(たん)々(たん)と答えると、じろりと水菜を見た。

「それとも、覚えてないのか？」

「いえ、覚えてますけど…」

怖い。

昨日も思ったけど、ケイの威圧感、はんぱじゃない。怒られた気分になって、水菜はしゅんと肩を落とした。

ただ、聞いてみたかっただけなのに、何がいけなかったのだろう。

「その、スーパーメイドって、なんなのかなって…」

語尾がだんだん小さくなっていく。また冷たく切り捨てられたら、あとは食事に集中しよう。せつかくおいしいごはんを、落ち込みながら食べたくない。

「スーパーメイドというのは、日本メイド協会が認定している資格だ」

なのに、水菜の意に反して、ケイはあまり抑(よく)揚(よう)のない口調ながら、ちゃんと答えてくれた。水菜はまたぱっと顔を上げる。

ケイの顔は、まったくの無表情のままだけど、怒ってはいないようだ。もしかしたら、こういうしゃべり方をする人なのかもしれない。

「スーパーメイドの試験は、二年に一度行われる。試験内容は、料理や掃除といった、メイドとしての基礎はもちろん、世界各国のアップークラスの屋敷でも勤(つと)められるように、少なくとも、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、ロシア語の五カ国語をしゃべれることと、政治経済など、その階級に合わせた話題についていけること、パソコンなどのOA機器に通じていること、完璧な立(た)ち居(い)振(ふる)舞(ま)いができること、などだ」

ケイは水菜が理解しているかどうかをいぶかしむように、そこでいったん言葉を切った。水菜は聞いていることを強調するために、大きくうなづく。ケイの言葉が続いた。

「そのほかにも、資格は持っていれば持っているほど有利になる。合格者が出ることのほうがめずらしいその試験に受かったのは、いままでで、俺を含めて十一人。ちなみに、俺が持っている資格は、大型車やクレーン車、飛行機などのあらゆる運転免許、秘書検定、介護士、司法資格、パソコン関係の資格はほとんど全部、栄養士、あとはそうだな、花火を上げられるように、火薬物取り扱いの免(めん)許(きょ)なども持っているな」

「…はあ」

水菜は食べるのも忘れて、ケイの顔をまじまじと見た。

本気で言ってるの？ 冗談じゃなくて？

本当に、スーパーメイドなんて資格があるの!?

「スーパーメイドになれば、派遣料が破格になる。俺はいまのところ、一日百万円だ」

「ひゃ、ひゃ、ひゃ、百万!?!」

水菜の声が裏返った。一日、どこかで働くだけで百万。そんなこと、本当にあるわけ!?

あまりにも表情が変わらないので、冗談なのか本気なのか、ケイの顔からは判断ができない。だけど、だまされているような気がする。

だって、だって、だって!

日本メイド協会、という団体名すら聞いたことがないのに!

「外国からの賓(ひん)客(きゃく)を招いたパーティーなどのときに雇(やと)われることが多いから、期間は一週間から、長くて二週間。短いと三日というときもある。日本メイド協会に三割取られて、残りの七十万が俺の給料だ」

「七十万!?!」

それでも、水菜にとっては大金だ。それだけのお金を稼ぐためには、いったい自分は何日バイトをしなければならいだろう。

「どうして、俺がスーパーメイドの資格を取ったかというとなるべく働きたくないからだ。期間に関係なく、一月に受ける依頼は一件と決めてあるから、予約は五年先までいっぱい。まあ、ありがたいことだよな」

「はあ、そうですか」

もう、水菜は気の抜けたようなあいづちしか打てない。

本当かうそかなんて、考えるだけムダだ。だったら、ケイの言うことを信じておいたほうがいい。いちいち疑ってかかるほうが、めんどくさい。

「ということを聞かされて、ここに来たんじゃないのか?」

「は!?!」

突(とつ)然(ぜん)、話をふられて、水菜は目をみはった。

そうだ! それもあった!

きっと、自分はだれかとまちがわれているのだ!

「仕事をしていない期間に、メイドのしつけをすることもある。得意先に頼まれて、仕方なく、だけどな。まあ、日本メイド協会を通してないから、金は全部自分のものになるし、教えるといっても、基礎だけだから楽だし、そんなに悪いことばかりじゃない。ちなみに、おまえを一カ月預かって、向こうの望むようにしつけるのにかかる金額は二百万。安いもんだ」

「ええ一つ!?!」

メイドをしつけるだけで、二百万!?! そういうの、ぼったくりって言うんじゃないの!?!

「水菜にはオプションがあるから、五百万だがな。しかしなあ、なんでまた、好き好んで、あんな家に行くかね」

あんな家も、こんな家も、知るもんか一つ!

やっと、話が見えてきた。ケイがしつけることになっているメイドが昨日来る予定で、でも、そのメイドは来なくて。その代わりに、夏みかんを食べようとしてふらふらと入ってしまった自分が、その相手とまちがわれたのだ。

遅刻だ、と言った意味も、ようやく分かる。親がいるのか? と言ったときの、不思議そうな顔も。

自分は、ケイの言う、あんな家、に親に売られたと思われているのだ!

ちがう! 全然、ちがう!

どうしよう、どうしよう。早く誤解をとかなきゃ、そのメイドの代わりに、いろいろしつけられてしまう！

「とりあえず、この部屋は使わせてやるし、三食、きちんと食べさせる。ただし、俺のしつけは厳しいぞ」

口を開こうとして、水菜はすぐに閉じた。

待つて。ちょっと待つて。

いま、なんて言った？

「す、住み込みですか？」

水菜は慌てて聞く。ケイはあきれたような顔で水菜を見た。

「それすらも、聞かされてないのか？ まあ、俺も、名前すら知らなかったからな。あっちの手落ちだろう。そう、ここに住み込みだ。普通は通ってもらうんだが、今回は中身が中身だしな」

住み込みということは、寝る場所があるってことで。三食つきだと、飢え死にもしない。いいか、よく考えろ。

ここで、人違いです、と言え、きっと追い出される。バイト代が入るまでは、あと一週間ちょっと。行くところもなければ、お金もない。この炎(えん)天(てん)下(か)では、日射病になる恐れもある。

だけど、このまま黙っていれば。とりあえず、生き延びられる。一カ月、丸々いる必要はない。バイト代が振り込まれたら、こっそりと出ていけばいい。

「もう食わないのか？」

お椀(わん)を持ったまま考え込んでいる水菜に、ケイが声をかけた。水菜は、食べます、食べます！ とまた食事を始める。すっかり冷めてしまったおかゆは、それでもおいしかった。冷めてもおいしい、なんて、本当に料理人顔負けだ。

水菜が全部食べ終わると、ケイはお盆を下げた。それから、立ち上がる。全部の動作がいちいちきれいで。思わず、水菜はケイの動きに見とれた。

「ああ、そうだ」

ケイはふと思い出したように、水菜に告げる。

「風呂を沸(わ)かしてあるから、入れ。着替えやタオルは、脱衣所に置いてあるから。風呂はトイレより手前の右側にある。起き上がれるな？」

「はい」

ごはんを食べてないから倒れただけで、病気じゃない。それに、公園の水で体を拭(ふ)いていたとはいえ、お風呂にはずっと入っていないから、さっぱりしたい。

お風呂につきりながら、メイドの件はゆっくり考えよう。人違いだと、いますぐに言う必要もないし。

「ありがとうございます」

水菜はぺこりと頭を下げた。ケイはそれを見て、初めて笑う。

人が悪そうに、にやり、と。

その表情の変わりように驚いて。水菜はまじまじとケイを見つめた。

こんな顔、できたんだ。

いや、もちろん、人間なんだから、笑えるに決まってるけど。眉間に皺を寄せた顔と、無表情しか見ていなかったの、水菜はものすごく驚いてしまった。

でも、でも、でも。

笑った顔が一番怖いのは、どうしてだろう。
「風呂に入って、きれいになってもらわないと、俺もいろいろ困るからな。まあ、気の毒
だとは思いますが、自分の選んだ道だ。食べなくて、倒れるよりも、きつとましたと思うぞ。
…たぶん、な」
ぞくり、と背中が震えた。
絶対に、出ていったほうがいい。
これ以上、ここにいないほうがいい。
理性はそう告げているのに。
水菜はケイが立ち去るのを待って、お風呂場へ向かった。
とりあえず、お風呂につかって、ゆっくりと考えたかった。

本文 p36～45 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>